

6 月は降雨によって各種病害が発生しやすく、また、気温の上昇に伴って害虫の発生も多くなる時期です。病虫害の発生を抑えるうえで重要な防除時期となりますので、本誌を参考に薬剤防除等を徹底してください。天候不順により薬剤防除ができない日も多くなるため、天気予報には十分注意し、計画的な防除を行うようにしましょう。

露地カンキツ

●ミカンハダニ

4 月上中旬の気温が平年より 3℃ほど高く推移し、ミカンハダニの発生に好適な条件でした。また、4 月末現在、園地によっては発生が多くなっている園もみられています。皆様の園地での発生状況はいかがでしょうか？ミカンハダニの発生が認められる場合は、後述の黒点病防除と合わせ、マシン油乳剤 200 倍を加用し散布するようにしてください。

●黒点病

黒点病を抑えるための重要なポイントは、①伝染源の除去、②累積降雨量に応じた薬剤防除です。以下の対策を徹底してください。

① 伝染源の除去

枯れ枝や園内に放置された剪定枝などは黒点病の伝染源となりますので、園外に持ち出し処分するようにしてください。なお、枯れ枝は 1 回のみならず随時除去することで、より本病の発生を抑えることができます（表参照）。また、園内に残っている切り株も伝染源になるので、伐根するかポリ袋で全体を覆う等して菌の飛散を防止します。

② 薬剤防除

薬剤防除は、前回薬剤散布後の累積降雨量を目安に行います。累積降雨量は各ほ場によって異なるため、ほ場ごとに簡易雨量計を設置して確認することが望ましいです。降雨が続き、目安の累積降雨量に達した場合は、雨の合間を縫ってでも薬剤散布を行います。なお、降雨量が少ない場合でも、前回の薬剤散布から 1 ヶ月を目安に再散布を行うようにしてください。

薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）を使用します。本剤を単用で散布する場合は、散布後の累積降雨量の目安を 200～250mm とし、マシン油乳剤を加用する場合は、散布後の累積降雨量の目安を 350～400mm とし、再散布を行

ってください。

ただし、マシン油乳剤を加用する場合、散布後2～3日のうちに降雨があると薬剤が流れやすくなり、有効成分の付着が少なくなる可能性があります。このため、散布後の天気予報にも十分注意して薬剤の散布計画を立ててください。なお、マシン油乳剤の濃度は、ミカンハダニの発生が認められる場合は200倍、発生が認められない場合は400倍とします。また、マシン油乳剤の使用は6月下旬までとします。

表 カンキツ黒点病の枯れ枝除去による防除効果（2022,果樹試）

試験区	調査果数	発病果率 (%)	発病度
枯れ枝除去区	335	16.1	3.7
枯れ枝放置区	519	27.1	7.5

※ 枯れ枝は、4/13、6/13、8/2、8/25に除去

※ 枯枝除去区、放置区ともに同一の体系防除を実施

●かいよう病

発芽前～梅雨時期までが本病の重要な防除時期です。本病にかかりやすい品種（中晩柑類、高糖系温州）や温州ミカンであっても、昨年本病が発生した園、風当たりが強い園、幼木や高接ぎ園では、定期的な薬剤防除を行ってください。

薬剤は、クレフノン 200 倍加用コサイド 3000 2,000 倍やクレフノン 200 倍加用ムッシュェボルドーDF 500 倍等を散布します。

●ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

6月は葉上で増えたミカンサビダニが果実へ移動を始めるため、重要な防除時期となります。また、チャノキイロアザミウマについても果実の前期被害を抑えるための大切な防除時期です。

ミカンサビダニとチャノキイロアザミウマを同時防除する場合は、コテツフロアブル 4,000 倍、マッチ乳剤 3,000 倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布します。ミカンサビダニのみを防除する場合は、サンマイト水和剤 3,000 倍等を散布します。なお、サンマイト水和剤にマシン油乳剤を加用すると防除効果が低下するので注意してください。

防風樹として茶やサンゴジュが使われているなどチャノキイロアザミウマの寄主植物が隣接する園では、当該植物が増殖源となって被害が増えることがあります。こうした園では、より薬剤防除を徹底しましょう。

●カイガラムシ類・ゴマダラカミキリ

近年、各種カイガラムシ類の発生・被害が多くなっています。5月下～6月上旬頃は、カイガラムシ類の若齢幼虫発生期であり、重要な防除時期となりますので園内の発生状況をよく観察し、防除を行ってください。

フジコナカイガラムシが発生している場合は、チャノキイロアザミウマやゴマダラカミキリの防除も兼ねて、モスピランSL液剤2,000倍を散布します。フジコナカイガラムシは、葉や果実の重なったところなど、薬剤のかかりにくいところに寄生することが多いので、散布ムラがないよう丁寧に散布してください。

ヤノネカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ、アカマルカイガラムシが発生している場合は、エルサン乳剤1,000倍、トランスフォームフロアブル2,000倍等を散布します。

ハウスミカン

●アザミウマ類

着色時期を迎える前に、園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドに光反射シートを設置し、本虫のハウス内への侵入を抑制します。

また、薬剤防除の際は、アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なるため、発生種に応じた薬剤を選定しましょう。本誌5月号に対応表を記載しているので参考にいただき、収穫前日数に注意して防除を行ってください。

アザミウマの食害によりできた傷口は果実腐敗の原因の1つであるため、防除の徹底に努めるとともに傷果は取り除くようにしてください。

●果実腐敗防止対策

収穫の7～10日前に、ベンレート水和剤4,000倍またはトップジンM水和剤2,000倍のいずれかとベフラン液剤25 2,000倍を必ず混用して散布してください。薬液が霧状に出るノズルを使用し、果実1つ1つを薬液で包み込むようにムラなく丁寧に散布することが重要です。

果実腐敗は、果皮の傷から病原菌が感染し、発生します。収穫の際は、ハサミで果実を傷つけないよう丁寧に扱い、また、傷果を収穫物に混入させないように注意してください。

緑かび病が発生している果実は、そのまま放置しておく、菌が飛散し園内に蔓延してしまいます。樹上での発病果や落下した果実は、見つけ次第取り除き、園外で処分するようにしてください。

ナシ

●黒星病

4月上旬の降水量が多く（平年比 222%）本病の発生には好適な条件であったと考えられます。皆様の園地では防除はうまくいったでしょうか？発病葉や発病果は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第取り除き、園外で処分してください。6月中旬頃までは、輪紋病との同時防除を兼ねて、キノンドーフロアブル 1,000 倍またはフロンサイド S C 2,000 倍を散布します。

6月下旬は、収穫期の本病の発生を抑えるうえで非常に重要な防除時期です。発生の有無にかかわらず、スコア顆粒水和剤 2,000 倍等の D M I 剤をかけムラがないよう散布しましょう。

●ニセナシサビダニ

6月は本虫の増殖時期であるため、被害がみられる園ではダニトロンフロアブル 2,000 倍またはハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布してください。

ブドウ

●袋掛け前の防除

晩腐病には果実小豆大頃までにオンリーワンフロアブル 2,000 倍等、チャノキイロアザミウマにはアディオンフロアブル 1,500 倍を散布します。この他、べと病が多発する園ではリドミルゴールド M Z 1,000 倍等を散布しましょう。

また、チャノキイロアザミウマは軟弱な葉で増殖しやすいため、副梢の摘芯を徹底するとともに、副梢の 2 番花（果）房は見つけ次第取り除きましょう。特に本虫の被害が多いシャインマスカットでは必ず取り組みましょう。

●袋掛けの注意点

摘粒後、できるだけ早く袋掛けを行いましょう。ただし、降雨などで果房が濡れている場合は、果房が乾いてから袋掛けを行ってください。濡れたままの果房に袋掛けを行うと、晩腐防の発生を助長する恐れがあります。

また、袋の止め口はしっかりと締めましょう。止め口が緩く、また、止め口をきつく締めていても、その上の袋口に雨滴などが溜まる隙間があると、雨滴とともに病原菌が袋内に流入します。針金を止め口の上部まで回して、隙間がないようにしましょう。

●袋掛け後の防除

袋掛け直後に、チャノキイロアザミウマ対策としてダントツ水溶剤 4,000 倍やアルバリン（スタークル）顆粒水溶剤 1,000 倍等を、枝膨病にはストロビードライフロアブル 2,000 倍を、べと病に対してはボルドー液（I C ボルドー48Q、66D）50 倍を散布します。なお、I C ボルドーにアビオンEを加用すると防除効果が向上します。

カキ

●炭そ病

梅雨時期は本病の主要な感染時期となります。ジマンダイセン水和剤 500 倍を散布し、その後は、累積降雨量 150～200mm を目安にジマンダイセン水和剤やエムダイファー水和剤等の追加散布を行ってください。散布の際は、樹の上部まで十分にかかるよう丁寧に散布しましょう。

なお、マンゼブを含む農薬（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）の総使用回数は 2 回なので、総使用回数を超えないよう注意してください。

●害虫対策

6 月は、カキノヘタムシガおよびフジコナカイガラムシの重要な防除時期です。スミチオン水和剤 40 1,000 倍を散布してください。

キウイフルーツ

●すす斑病

6 月は、葉および果実への感染を防ぐための重要な防除時期です。ベンレート水和剤 2,000 倍、ストロビードライフロアブル 2,000 倍等を、果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも丁寧に散布するようにしてください。本時期の防除が不十分だと、後々果実で発生が多くなります。また、軟弱に伸長した枝では、葉でのすす斑病の発生が多くなるため、不必要な枝を伸ばさないような栽培管理を行いましょう。

なお、キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や指導に従って薬剤を選択してください。